須磨海浜水族園 亀ちゃんの
あっぱれ！
水の動物たち

「種」の継承 未来のために

動物学をやっていると人間をどうしても動物とみなし、あれこれ比較してしまう癖がつく。人間が動物として特徴的なのは、大脳が極めて発達していることである。大脳があるから憲法をつくることができるし、それを曲げて解釈しようとするような人間もでてくる。それでも人間の方が動物に比べて高等だと思っている方々がほとんどであろうが、実は決定的に動物より劣っていることがある。いや、最近、劣ってきたのかもしれない。未来のことを考えて、現在の振る舞いを決める能力である。

6月といえば繁殖のシーズンである。アカウミガメも産卵のピークを迎えるし、南の海ではサンゴが卵を産むようになる。アカウミガメは南日本の黒潮が流れる太平洋岸の砂浜にやってきて産卵する。これは生まれた子ガメを黒潮に乗せて、太平洋の北の方に分散させた方が子ガメたちの生存率があがるからだ。サンゴは満月前後の夜に一斉に卵を産むが、これはその時期の潮の満ち引きが大きく、海に放出した卵を広く分散させるのに適しているからだと言われている。

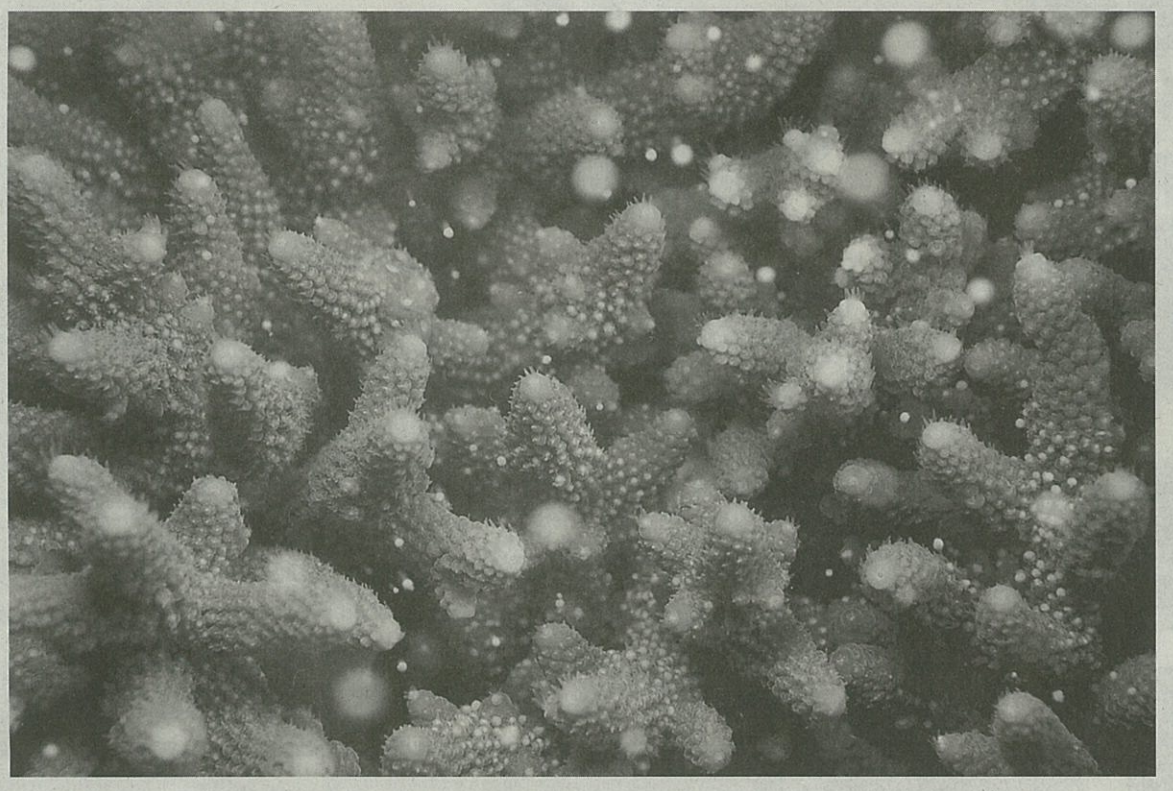
須磨海浜水族園では現在、クサフグの産卵に関する企画展（今月29日まで）をやっているが、このフグの産卵もすごい。6月の満月や新月の時期、つまり潮の干満が大きい時の満潮時に、このフグは砂利のある砂浜に上がってくる。そして、まずは雌が産卵し、雄はそこに精子をかける。その場所は大潮の満潮時以外は干上がってしまい、天敵が侵入しにくい。そこで、卵は育ち、ふ化することができる。もちろん、干上がってもいいように、クサフグの卵の膜は丈夫だ。クサフグたちは子どもの生残率を高めるために、わざわざ大潮を選んで波打ち際までやって来て産卵する。

ここで確認したいのは、アカウミガメもクサフグも産卵しやすい環境を選ぶのではないということだ。つまり母は母にとって快適な場所ではなく、子どもの将来を考えて産む場所を決めるのである。ウミガメは苦労して日本の海岸までやってきて、さらに重い体を引きずって砂浜に上陸して産卵する。サンゴは脳もないのに、満月になるのを待って、そして産卵する。クサフグも危険な海岸線ギリギリまで上がって来て、ほとんど水から出たような状態で産卵する。ウミガメもサンゴもクサフグも、みんな、次の世代のために子どもを残すために、自らの安全や快適さを犠牲にし、リスクを負って繁殖するのだ。

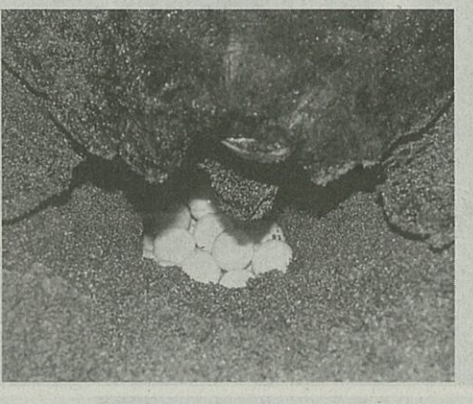
ところが、人間、特に日本人は出産を次世代への「種」の継承だという感性を忘れかけている。次世代以降の社会が想像できないのかもしれない。女性に対して、子どもを作る、作らないの話はタブーになったし、子どもを持つ親の行動をみていると、次世代のためにというよりも、むしろ親のために子どもを作ったのかと疑ってしまうようなことも少なくない。それが影響してか、日本は少子化、すなわち人口減少、高齢化の道をまっしぐらに走っている。動物の種として、繁殖をおろそかにしているのである。

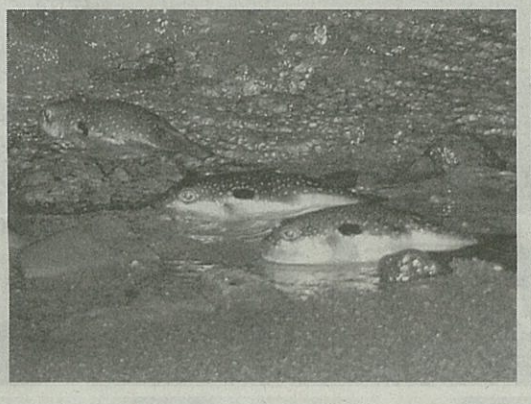
人間の大脳のすぐれたところは、人間に知能をもたらしたことである。知能というのは、学習能力とはまったく違い、経験したことのないことをあれこれ予測する能力である。だったら、小賢しく現状ばかり議論せず、次世代、さらに50年後、100年後の人間のために何ができるのかをもっと真剣に考える文化を持ちたいものである。

＝次回は7月19日



満月の夜に産卵するイシサンゴ＝黒潮生物研究所提供





㊤砂浜に産卵するアカウミガメ。卵は本当なら砂に埋まっているが、撮影のため砂を掘って見える状態にした＝愛知県の渥美半島で ㊦大潮の満潮時、砂浜まで上がってきて産卵するクサフグ＝神戸市の舞子海岸で

亀崎直樹（かめざき・なおき）
1956年生まれ。神戸市立須磨海浜水族園学術研究統括。元園長。岡山理科大学生物地球学部教授。専門はウミガメを中心とした海洋生物学。